

[参考事項]

成果情報名：夏秋雨よけ栽培トマトは6月の摘花処理で樹勢が回復し9月以降の収量が増加する

研究機関名 農業試験場 野菜・花き部 野菜担当
担 当 者 今野かおり・菅原茂幸・本庄求

[要約]

トマトの6月23日前後の摘花処理により、摘花処理段以降の数段の果房下茎径が太くなり、樹勢の回復がみられる。8月上旬の収量は減少するが、単価の高い9月～10月の商品果収量を確保できる。

[キーワード]

トマト・9月収穫・摘花・樹勢

[普及対象範囲]

県内全域

[ねらい]

本県のトマト栽培はパイプハウスによる夏秋雨よけ栽培が主体である。この作型では市場価格が安価な7月下旬から8月中旬に収穫が集中し、8月下旬からの樹勢低下と、単価の高い9月の収量低下が問題となっている。現地では摘果や主枝更新で樹勢の回復に努めているが、作業が煩雑であり高度な技術が必要である。一方、他県では8月に収穫する段位を摘花処理し、簡易に樹勢を維持する方法が提案されている。そこで、本県における摘花処理、主枝更新処理が、収量と9月以降の樹勢回復に及ぼす影響を明らかにする。

[成果の内容及び特徴]

- 1 主枝更新区(以下更新区)、摘花区では処理後の7段、8段で茎径が太くなり樹勢が強くなる傾向があるが、9段以降は慣行区と同等となる(図1)。
- 2 慣行区の収量は果房段数10段目から低下したが、摘花区は9月収穫の10段目も高い収量を得ることができる(図2)。
- 3 商品果収量は摘花区で最も多く、商品果率も高くなる(表1)。9月以降の商品果収量は、摘花区、更新区とも増収するが、障害果の割合は、樹勢が強い更新区で尻腐れ果の割合が高くなる(表1、図3)。

[成果の活用上の留意点]

- 1 本成果はトマト品種「りんか409」での試験結果である。
- 2 主枝更新処理、摘花処理後の樹勢は一時的に強くなり、その後慣行と同程度になる傾向があるため、管理方法について今後検討する。

[具体的なデータ等]

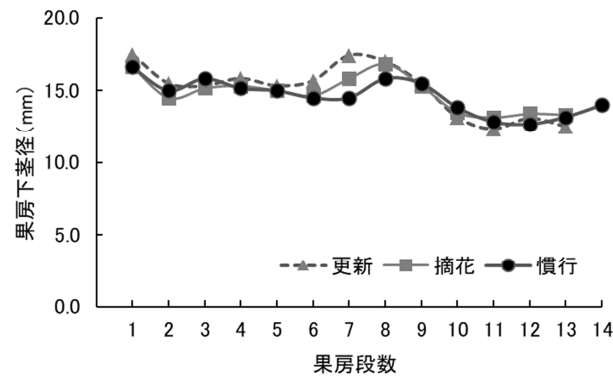


図1 果房段別の果房下茎径

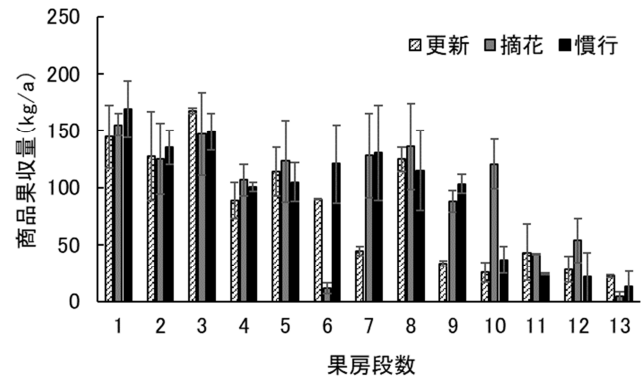


図2 果房段別の商品果収量

注) 図中のエラーバーは標準誤差 (n=2)

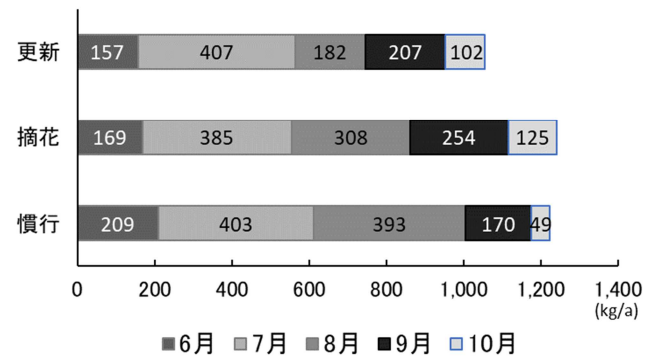


図3 月別商品果収量の推移

表1 収量と障害果率

試験区	総収量			商品果収量			商品果 1果重	商品果 率	糖度	障害果割合				
	重量	果数	重量	重量	果数	重量				尻腐れ果	小玉果	乱形果	規格外 放射状裂果	空洞果
更新	6,511	33	1,445	4,755	23	1,055	208	69	5.5	10	3	2	2	1
摘花	7,182	37	1,594	5,591	29	1,241	196	77	5.2	5	5	0	0	4
慣行	7,288	36	1,618	5,511	27	1,223	207	74	5.4	3	4	1	1	6

注) 商品果: A品とB品の合計 (A品: 外観、形状に問題なし B品: 軽微な問題あり)

【試験区】

更新: 6月23日前後に開花していた6段または7段花房を主枝ごと摘心し直下の側枝を伸長

摘花: 6月23日前後に開花していた6段または7段花房を摘除

【耕種概要】

供試品種: 穂木「りんか409」、台木「キングバリア」

播種日、定植日: 2020年2月28日に穂木を播種、4月30日に定植

収穫期間: 2020年6月17日～10月26日

栽植様式: 畝幅200cm、株間45cm、2条植え

仕立て方法: 主枝1本仕立て

[その他]

研究課題名: 野菜の競争力強化を目指した新栽培技術の開発

研究期間: 令和元年度～令和2年度

予算区分: 県単

掲載誌等: なし